16.「ある決断」

アンコールの演奏を終えると、メンバー４人、そろってフロントの際に並んだ。手をつなぎ、歓声で沸き返る場内が鎮まるのを待つ。

しぃーっ、と、TAKUYAがくちびるに指をあてる。

「JUDY AND MARY、POP LIFE TOUR ’98!

みんな、どうも、ありがとうございました——！」

７月２３日、名古屋レインボーホール。

熱気で膨らんでいるアリーナの空気のなかで、マイクを通さないYUKIの声が、鳴った。

「YUKI、ありがとう！」

アリーナの前のほうで男性ファンがそう呼ぶのを聞いて、YUKIは思わず泣きそうになった。自分は、今、ここで生きていると、わけもなく思った。

（あたし、すげえ、生きてるっ。こんなにみんなと一緒に息をして、だから、ますます生きすぎてる感じになっちゃうんだ。楽しい！！）

名古屋、新潟、仙台、広島、福岡、鹿児島、大阪、札幌、横浜、石川、そして東京。全国１１ヵ所、２４本。いずれもアリーナ・クラスの会場で２DAYS、３DAYSとライブを行う。YUKIはこれまでになく体調管理に気を配った。喉の手術から、半年。『POP LIFE』のレコーディングでの辛苦を越えて、今、YUKIは心からライブを楽しんでいた。

「YUKI、あんな所まで動かなくっていいんだよ。YUKIはこのツアーのコンセプトを全然わかっていない」

横浜アリーナの1日目を終えて楽屋に引き上げてくるなり、TAKUYAは厳しい口調でYUKIにそう言った。

初めての横浜アリーナ、YUKIはいつか観たサザンオールスターズの桑田佳祐のように、横アリのステージを端から端まで動いてみたいと演ってみたのだったが、そういうパフォーマンスはこのツアーのコンセプト違うのだとTAKUYAは言った。

「このツアーは、演奏をきっちりやって、４人で聴かせる。じっくり観せる。それをトータルでイメージして、俺はセットも映像も考えたんだ。みんな去年のスタジアム・ツアーを引きずりすぎてる」

あぁ、そうか、そうだったのだとYUKIは力なく頷いた。

名古屋でやっていた最後の肉声での挨拶も、このツアーのテーマにはそぐわないと、途中で止めにしていた。確かにTAKUYAの言う通りなのだ。ツアーのコンセプトからプランまでを彼がバンドに提案してきたとき、YUKIはそれに同意し、納得していた。

けれども、彼の言うように、去年のスタジアム・ツアーをどこかで引きずっていたことをYUKIは否定できない。YUKIはあのツアーでの自分の歌が大好きだった。そして、再び歌えるようになった今、YUKIはライブにこのうえない解放感と喜びを感じていた。

しかし、コンセプトは動ではなく、静かのイメージだ。

しかもこれまでのJUDY AND MARYのステージにはなかった、シュールでプログレッシブなビジュアルをTAKUYAは用意していた。

けれども、ステージに立ったYUKIの姿や歌は、明らかにそれと異なっていた。そこに立つメンバーの意識がそぐっていない。

TAKUYAが怒るのも当然だった。

『POP LIFE』のレコーディングから事実上バンドを牽引してきた彼のなかでは、このとき相当なフラストレーションが溜まっていた。横浜アリーナでの３日間で、YUKIも恩田も五十嵐もそれに気づいていた。

しかし、誰も、とりたててTAKUYAに働きかけようとはしなかった。

事を切り出す役目は、結局、TAKUYAに回ってくるということなのだろうか。9月19日、金沢。髪の毛を金髪に染めて石川産業展示館4号館の楽屋へ入ってきたTAKUYAを見て、YUKIたちは驚いた。

「今のツアー、俺は演ってて面白くない」

開場の時刻を過ぎたころ、TAKUYAはそう切り出した。

「実際みんな、今の俺らのライブはどうなの?」

それは、このバンドについてどう思っているのか?　という意味だ。

JUDY AND MARYの最初のころのかっこいい感じが今の俺らにはないと思う、YUKIも歌はうまくなっているけど、前のような切羽詰まった感があんまり感じられない、少なくとも横で演っててグッとくる感じがしない——言葉を選ばず、率直な気持ちをぶつける彼に、YUKIは黙っていられなかった。

「ちょっと待ってよ、そんなこと言われる筋合いはないよ」

「TAKUYA、それ、どういう意味だよ。俺は一生懸命やってるぜ」

『POP LIFE』のレコーディングからここまで好調にプレイしてきた五十嵐も、怒りを隠そうとしない。

「じゃあ、やってみてよ。客、奪ったるでっていう、昔の俺らみたいな、むちゃむちゃかっこいいライブを今日これからやろうよ」

本番１時間前にそんな抜き差しならぬ話をしているのである。やり場のない憤りを抱えてままステージに立った4人は、この夜、石川産業展示館4号館をライブハウスに変えてしまった。

言ってしまえば、それは、TAKUYAが横浜アリーナでYUKIに呈したような、コンセプトチュアルなライブからはほど遠い。けれども、一触即発の危うさを内包していた、かつてのJUDY AND MARYのライブを想起させるに十分なパフォーマンスだった。

「みんな、やればできるじゃん。俺はこのことを言ってたんだよ」

しかし、いいライブをやれたからといってすべてが解決するほど、バンドは幼くはなかった。JUDY AND MARYは十分に成熟し、それによって不要な事柄も内包していた。ついてしまった脂肪をなんとか削ぎ落とそうと、TAKUYAは努めていたのだろう。が、それは決して容易なことではないと、メンバーは皆、気づいていた。ライブ後、もう一度ミーティングをしようと、誰からともなく声が上がった。

金沢2DAYSを終えた夜、JUDY AND MARYはある決断をする。

「しばらく曲を作るのを止めよう」

これがメンバー共通の意見だった。今、それぞれが思っていること、そしてJUDY AND MARYのこれからについてを話し合った結果、たどり着いた答えだった。

それは、かつてこのバンドが口にしたことのある言葉でもあった。『THE POWER SOURCE』を作ったあとにも、一度こういう話は出ていたのだ。バンドを休んで、それぞれ休養をとるなり、好きなことをやるなり、自由な時間をとってバンドに戻ってこよう……。けれどもあのアルバムを作ったあとでは、メンバーの希望は叶わなかった。JUDY AND MARYは、もはや4人の意思だけで走ったり休んだりすることのできるバンドではなくなっていたからだ。

このミーティングを始めてしばらくの間、誰も手をつけようとしなかったビールを、それぞれ飲み始める。お互いに思っていることの全部を言えたかどうかはわからないが、YUKIは気持ちがラクになっていくのを感じていた。

悲しい気分ではなかった。

知らず知らずのうちにこんがらがっていたさまざまな思いが解けていく心地よさのほうに、気持ちを委ねようとしていたのかもしれない。

「じゃあ、東京ドームやろう!」

「いっとくか?」

「いいねー!!」

盛り上がるメンバーの背後で、マネージャーの堀江は会場のスケジュールを押さえようと、速攻で電話をかけ始める。

「年末のドームねえ。今からじゃあ、さすがに無理かもねぇ~」

「ライブハウスとかもやっちゃう？」

「押さえられるかな？今から」

「俺、来年どうしようかなあ。何やろうかな」

「あたしはじゃあ、このあいだ話した佐久間さんのヤツ、頑張ろう。英語詞も作ってみるよ」

「俺はホントにのんびり休んでみようかな」

「じゃあ、俺は……」

話せば話すほど、みんなの口調が朗らかになっていく。

不思議と寂しさは感じなかった。

静かに夜がおちて、ひとりの部屋に戻るまでの間は。

明後日でデビューして丸５年。今日ホテルのスイートで話し合い、

活動を休止することに決まりました。

年末のテレビもすべてストップ。紅白も出ないことになりました。

ラジオ、『ワッツイン』『non・no』もろもろ、

すべてをちゃんと終わらせなくちゃ。

発信するところも、もうどこもなくなっちゃう。

YUKIは佐久間さんのとこでしばらくやろう。英語詞、頑張んなきゃ。

ここからは本当に、実力をちゃんとつけないといけない。

これは４人で決めたことなんだ。信じよう、この決断を。

JUDY AND MARYはちゃんと続くんだ。

26才の今、JUDY AND MARYを全力でやりきろう。

そして何年か後に復活するとき、本物でいられるように頑張ろう。

ずっと新しくいるために。

日記には、9月20日の自分なりの決断が記してある。が、翌日、東京に戻るなり、YUKIはすぐに友人に電話をかけ、会っている。

話を聞いてほしかった。４人で決めたこととはいえ、本当にこれでいいのかどうか、誰かに話しをすることでもう一度、確かめたかった。不安でたまらなかったのだ。

9月23日、JUDY AND MARYはON AIR麻布スタジオで「帰れない２人」をレコーディングする。

「ミックス、あと3~4時間かかりそうです。どうしますか?　僕が残りますから、出かけちゃってかまわないですよ」

ディレクターの土蔵に任せて、４人は一緒に食事をすることにした。

「まだ時間がかかりそうだね。じゃあ、ウチでお茶でも飲んでる?」

恩田、TAKUYA、五十嵐、４人でこうしてYUKIの家に集まるのは初めてだ。デビューする前に、TAKUYAのアパートにみんなで遊びに行ったことはあるが、４人で誰かの家でだなんて、あれ以来だ。

(あのときは確か、TAKUYAが入ったばっかりのころで、みんなでデヴィッド・ボウイのビデオとか観たんだよなぁ)

４人分のコーヒーを煎れながら、YUKIはそんなことを思い出す。

「おぉー、懐かしい!　このライブ」

何年か前のJUDY AND MARYのライブ・ビデオをみんなで観ている。

金沢の夜に話をしてからというもの、メンバー４人、なんだかすっかり仲が良い。バンドが進んでいく間、気がつけばギスギスしていたあの感じが、今はもう跡形もなく消えている。金属疲労を起こしていた部品を、きれいさっぱり取り除いた、今の自分たちはそんなふうなのかもしれないとYUKIは思った。

けれども、迷いはつきまとっていた。YUKIは悩みに悩んでいた。

24日、全スタッフがそろい、これからのことをもう一度、話し合う。暮れの『紅白歌合戦』まで、テレビも出る。東京ドームとライブハウスをやる。『果てしないたわごと』やラジオ番組も続行する。

そして、休止宣言はしないことにする。

しかし、10月1日日本武道館。楽屋へ入ると、TAKUYAと五十嵐が冷笑を浮かべて、マネージャーの堀江がもってきた新聞を見ている。

「なんだかなぁ。これ」

「誰だよ、こんなネタ出したのは」

見れば、JUDY AND MARY活動休止の記事が載っているではないか。「……ちょっと待ってよ。何よ、これ、笑えないよ。あたし、武道館では2日目の最後のMCで”東京ドームをやります”ってことだけ言おうと決めてたんだ。なのに、こんなの勝手に出ちゃって……あたし、どうすればいいの?」

「いや、いいんじゃない?　それで」

「東京ドームやります、それでいいよ。今日、明日の武道館のライブで、べつにこのことに触れなくていいと思うよ」

武道館での２日間、すべて演りきってやろうと４人は決めていた。

(楽しんでやる!)

しかしその気持ちも、この日ばかりは、オーディエンスのほうが上回っていた。新聞やインターネットで活動休止を知らされたファンは、JUDY AND MARYの一拳一動を見逃してなるものかと、開演前から異様な熱気でYUKIたちを待ちかまえていたのである。

(すごい! すごいよ!　すごすぎるよ、みんな!!)

ステージに出るなり、ファンの気持ちが痛いほど伝わった。YUKIは思いのありったけを込めて、歌った。今日は絶対、この歌でライブを始めたい――「小さな頃から」で始まったこの武道館ライブは、JUDY AND MARYのベスト・ライブ、あの”りんくうフェスティバル”と同じくらい、大切なベスト・ライブだと、YUKIは今でもそう思っている。